

一、経済学の方法と『資本論』全三部の概要

経済学の方法

今日から本論に入っていきます。第一講でお話ししたように、研究対象となるのは、資本主義的生産様式です。まず、何から、どのように、研究を始めるのか、という経済学の方法そのものが問題となってきます。具体的なものから始めるのか、抽象的なものから始めるのか、それが問題なのです。

マルクスは準備草稿の一つである「経済学批判への序説」のなかで、もし具体的な経済的諸現象から出発したらどうなるのか、と問題提起しています。

「実在的で具体的なもの、現実的前提をなすものから始めること、したがって、たとえば経済学では、社会的生産行為全体の基礎であり主体である人口から始めることが、正しいことに思われる。しかし、もっと詳しく考察すれば、これはまちがいだということがわかる」（全集⑬六二七ページ／『経済学批判』への序言・序説』五九ページ古典選書）。

というのも、人口は、労働者階級や資本家階級という諸階級を前提とし、諸階級は、賃労働や資本を前提とし、賃労働、資本は、交換、分業、価値等々をそれぞれ前提としていますので、まずその前提とするものを説明することが求められてくるからです。

したがって、経済学の研究の出発点は、それ以上前提となるものが存在しないもつとも抽象的事実にまでさかのぼる必要があるのです。

「私は分析的にだんだんもつと簡単な概念に考えついてゆくであろう。表象された具体的なものから、だんだん希薄になる抽象的なものに進んでいつて、ついには最も簡単な諸規定に到達するであろう。そこでこんどはそこからふたたびあともどりの旅を始めて、最後にはふたたび人口に到達するであろう。といっても、こんどは、一つの全体についての混沌とした表象としての人口にはなくて、多くの規定と関係とをふくむ一つの豊かな全体としての人口に到達するであろう」（同）。

つまり経済学の「研究」とその「叙述」とは、全く逆方向の運動となるのです。すなわち、まず経済学の「研究」は、分析をつうじて具体的な経済的諸現象から抽象的なものへと前進し、経済学にもつとも抽象的な要素に到達します。続いてその「叙述」は、そのもつとも抽象的な要素からはじめて、最後は「多くの規定と関係とを含む一つの豊かな全体」としての具体的な経済的諸現象の叙述で終わる、というのです。「萌芽からの発展」は、経済学の叙述の方法となるもの、ということができません。

マルクスは、この方法が、「明らかに、科学的に正しい方法」（同）だといっています。なぜなら、「具体的なものが具体的であるのは、それが多くの規定の総括だからであり、したがって多様なものの統一だからである。それゆえ、具体的なものは、それが現実の出発点であり、したがってまた直観や表象の出発点であるにもかかわらず、思考では総括の過程として、結果として現われ、出発点としては現われない」（同六二七、六二八ページ／同六〇ページ）からです。

こうしてマルクスは、まず資本主義的生産様式の「富の要素形態」（①五九ページ／四九ページ）、これ以上抽象化しえない「経済的な細胞形態」（①八ページ／一二ページ）である「商品」の研究から始め、『資本論』の「叙述」もこの「商品」から出発することになるのです。資本主義経済は市場経済を基礎としており、その市場

経済を支えるものが商品交換だからです。

マルクスは、このように、最も抽象的な商品の分析から出発し、その弁証法的展開をつうじて、より具体的な経済学的カテゴリへと展開していく「萌芽からの発展」を「発生的」方法とよんでいます。最も抽象的なカテゴリから、より具体的なカテゴリが発生するという意味でそうよんだのでしょうか。

いきなり「利潤」という「多くの規定の総括」としての「具体的なものから出発した古典派経済学者・リカードウは、この発生的方法を理解していないが故に混乱におちいった」として、マルクスは次のように批判しています。

「古典派経済学は、すべての収入形態とすべての独立な姿態を、それによって非労働者が商品の価値を分け取りする名義を、利潤という一つの形態に還元した。……古典派経済学は、いろいろな形態を発生的に展開することに關心をもたず、これらの形態を分析によってそれらの統一性に還元しようとする。というのは、与えられた前提としてのこれらの形態から出発するからである」（全集^⑥ III 六四四、六四五ページ／『剰余価値学説史』^⑨ 一七九、一八〇ページ）。

「古典派経済学」とは、科学的社会主義の源泉の一つとなったブルジョア経済学であり、イギリスのペティ、スミス、リカードウ、フランスのケネー、シスモンディなどがその代表的人物です。彼らは労働価値説をとない富の源泉を重商主義のように流通過程にみるのではなく生産過程に見いだそうとし、「科学の目」で資本主義的生産関係の内面的関連と本質を探ろうとしました。しかし、「発生的に展開」しなかったために、不十分なままに終わったのです。「古典派経済学」に対し、資本主義を意識的に粉飾し、弁護し、その矛盾をおおいかくす経済学を、マルクスは「俗流経済学」と軽蔑のまなこで批判しています。その代表的人物は、マルサス、セー、

シーニアなどです。

『資本論』全三部の概要

それでは、ここで、商品を出発点とし、最終的に資本主義的生産様式の運動諸法則と社会主義・共産主義への移行の必然性を明らかにする『資本論』全三部の概要を話しておきましょう。

まず第一部では、資本とは何か、それがどのように生産されるのか、という「資本の生産過程」が論じられます。

商品とは何かの分析をつうじて価値と使用価値の対立、さらには価値法則（商品の価値は、これを生産するのに社会的に必要な労働時間によってきまるという法則）が明らかにされます。次いで使用価値と価値の対立は商品と貨幣の分離・対立と、そこから生まれる販売と購買の分離・対立へと展開することが明らかにされ、ここに恐慌の抽象的可能性があるという重要な指摘がなされています。

そして蓄積された貨幣は、「自己増殖する価値」としての資本に転化し、資本の本質が剰余価値の生産にあることが明らかにされます。重要なことは、労働者を搾取してより大きな剰余価値を獲得することが資本主義的生産の「推進的動機」「規定的目的」とされることにあります。こうして資本がその本質にもとづき搾取を強化していく様々な形態が論じられていきます。

こうした搾取の強化により、資本は蓄積されていきます。一方の側の資本の蓄積は、他方の側に貧困と労働苦、奴隷状態などを生みだし、階級的矛盾を激化させます。第一部の最後に、資本主義の行きつく先は、「収奪者が収奪される」社会主義・共産主義の社会であることが、マルクスの比喩なき名文で語られています。

第二部は、「資本の流通過程」と題されていますが、実際には、生産過程と流通過程の統一、つまり再生産の総過程が論じられています。

第一部では、剰余価値の生産が論じられたにとどまっていたました。しかし、生産された剰余価値は、市場において実現されてこそ、資本は再生産され、蓄積も前進することになります。個別資本が、資本の循環・回転をつうじて、その「制限」を打ち破り、いかにしてより多くの剰余価値を実現するかという「当為」が探究されます。次いで社会全体の総資本の再生産は果たして可能なかが検討され、一定の条件の下でのみ可能となること、その条件が確保されないと、やがて社会全体の再生産過程が麻痺し、恐慌が現実のものとなることが明らかにされます。

第二部の主題の一つは、この恐慌論にあつたのですが、編集者エンゲルスは、この意図を汲み取れなかったために、現行の『資本論』ではその点が明確にされていません。この編集上の問題点を指摘したのは、不破氏の功績の一つであり、不破氏は、マルクスの準備草稿にもとづいて、恐慌の可能性が現実性に、現実性が必然性に転化していく過程を明らかにしようとしています。

第三部は、「資本主義的生産の総過程」と題されています。

第一部、第二部で資本の再生産過程という資本の運動の「本質論」を議論してきたのに対し、第三部では、「現実性」が議論されます。「現実性」とは本質と現存在の統一です。この段階で、冒頭にのべた「多くの規定と関係とを含む一つの豊かな総体」として、資本主義的経済的諸現象が、その本質との関わりにおいて説明されることになってきます。いわば現代資本主義とは何かが解明されるのです。

第三部の主題は二つあります。一つは、現実には剰余価値が利潤に転化し、資本は利潤の生産を唯一の目的に

して、生産力を発展させることがまず明らかにされます。いわゆる利潤第一主義です。この利潤第一主義は、一般的利潤率の傾向的低下の法則のもとで資本主義的諸矛盾を激化させ、ついには資本主義的生産の真の制限であることがつきとめられます。これによって資本主義的生産様式の歴史的限界が明らかにされるのです。

もう一つの主題は、産業利潤、商業利潤、利子、地代という「現象」を、価値法則という「本質」から説明しようというものです。

マルクス以前の古典派経済学は、逆にこれらの現象から出発して、資本主義的生産様式の本質に迫ろうとしたため失敗せざるをえなかったのです。

マルクスは、『資本論』の最後を、資本主義的生産様式のもとでは、次第にその階級的矛盾が激化し、資本家階級と労働者階級という二大階級の階級闘争が發展して、社会主義・共産主義社会へ必然的に移行せざるをえないことを明確にしておくことで締めくくろうとしたのですが、「諸階級」という見出しを書いたのみで、その生涯を閉じてしまいました。

しかし、マルクスの思いは、資本主義への批判を代表しうるのは、「ただ、資本主義的生産様式の変革と諸階級の最終的廃止とをその歴史的使命とする階級——プロレタリアート——だけである」(①二二ページ/二二ページ)との「あと書き」(第二版への)の文言にしっかり託されています。

そして、マルクスは「〃なんじの道を進め、そして人々をして語るにまかせよ!」(①一四ページ/一七ページ)というダンテの『神曲』からの引用で、私たちの背中を押してくれているのです。

二、「商品と貨幣」(第一篇)

商品の使用価値と価値

それでは、いよいよ本論に入ります。

第一部「資本の生産過程」は、「商品」から始まります。しかし商品を商品として眺めているだけでは、いつまでも静止したままであり、商品の展開という「運動」を見いだすことはできません。

第一講でお話したように「運動」はすべて対立物の統一としてのみとらえることができます。対立物とは、上と下、右と左のように、反対の関係にある、相互に切り離せない二つのものをいいます。右があるから左があり、上があるから下があるのです。

対立物の統一とは、運動する主体のなかに対立物が存在し、この対立する二つの側面の交互作用をつうじて、主体としての運動が始まることを意味しています。

例えば、人間という生命体は、生命体として日々運動していますが、生と死の統一（日々生きながら死に向かってすすんでいる）、同一と区別の統一（自分自身としての同一性を保ちつつ、日々変化し、区別されている）、有限性と無限性の統一（有限な存在でありながら、無限に認識を発展させうる）などの、対立物の統一としてとらえることができるのです。レーニンは、これをとらえて、「普通には死んだものと思われている諸概念をヘーゲルは分析して、それらのうちに運動が有ることを示している」（レーニン全集^⑧八二ページ／『哲学ノート』八二ページ）と書いています。

したがって商品の運動をみるためには、商品という「二つのものを二つに分け、この一つのものの矛盾した二つの部分を認識すること」（同三二六ページ／同三二六ページ）が必要となってきます。そこで、「われわれの研究は、商品の分析から始まる」（①五九ページ／四九ページ）ということになるのです。商品を分析して「二つの部分を認識すること」から、商品の運動は始まるのです。

ヘーゲルは全ての事物には、事物としての一定の質（或るものを或るものとして特徴づけるもの）と一定の量（質を捨象したもの）とがあるという、量と質の弁証法を展開しています。質でないものが量ですから、量と質とは対立物の関係にあります。したがってすべての事物は、量と質という対立物の統一（一定の量をもった一定の質としての事物）としてとらえることができます。

そこで、商品、例えば「鉄、紙などのような有用物は、どれも、二重の観点から、質および量の観点から、考察されなければならない」（①六〇ページ／四九ページ）。

商品というものは、人々の欲求を充足させるものとして市場で販売されるものですから、各商品は、その商品に特有の有用性という「質」をもっており、「ある物の有用性は、その物を使用価値にする」（同）。つまり、個々の商品のもつ「質」は、その商品の使用価値なのです。

これに対し各商品の量は、まず交換の際の量的比率としてあらわれてきます。もつとも単純な商品交換である物々交換を考えてみると、市場において、例えば米一キロと卵二〇個という一定の量的比率で交換されます。米という使用価値が、卵という使用価値と「交換される量的関係」（①六一ページ／五〇ページ）（交換比率）が、交換価値とよばれます。交換価値は、一見すると商品交換の当事者が勝手にその比率を合意する偶然的で相対的なものでしかないようにみえます。

しかし、決してそうではありません。ここでもヘーゲル弁証法が生きてくるのです。ヘーゲルは、同一と区別の統一を論じるなかで、相等性か不等性かを論じる「比較」について、次のように述べています。

「比較というものは、相等性および不等性にたいして同一の基底を持ち、それらは同じ基底の異った側面および見地でなければならぬ」（『小論理学』一一七節）。

つまり、二つの商品を比較するためには、二つの商品に「同一の基底」という共通のものがなければ、そもそも比較のしようがないのです。ヘーゲルはこの見地から、『法の哲学』において、物件の「量と質」を考察し、「物件の価値」という「事物の共通性が、そのばあい、私がそれらの事物を測りうるようにさせるわけである」（世界の名著『ヘーゲル』第六三節追加、藤野涉他訳、中央公論社）と述べています。マルクスも、『資本論』のなかの商品論については、『法の哲学』を参考にしたものと思われま（拙著『ヘーゲル「法の哲学」を読む』一粒の麦社、参照）。

マルクスは「諸商品の諸交換価値もある共通物に還元されて、諸交換価値は、この共通物の多量または少量を表わすことになる」（①六三ページ／五一ページ）とのべ、この量で測られる共通物が「価値」とよばれ、各商品は、一定の価値量という「量」をもつ存在であることを明らかにしています。

それぞれの商品は、それぞれ一定の価値量を自己の内に含んでいます。しかし、その価値量がどれだけのものであるかという絶対値は、顕微鏡をつかっても見ることはできません。ただ商品交換の際に、その交換比率において相対的に現れてくるのみです（例えば、卵一個の価値は、米五〇グラムの価値と等しいというように）。いわば、「交換価値」は、価値という商品の奥に潜む本質が表にあらわれた姿、つまり個々の商品のもつ「価値」の「現象形態」（同）なのです。

こうして、すべての商品は、使用価値と価値という質と量の統一としてとらえられます。

では、各商品のもつ価値量はどうにして決まるのかが次の問題となってきますが、それを明らかにするためには、まず価値の本質は何かが先に説明されなければなりません。

それは、言いかえれば、すべての商品の量としてはかられる「共通物」とは何かを探究することです。すべての商品は、人間の労働の産物という共通点をもっています。一つの労働が一面では使用価値を生みだし、他面では価値を生みだすのです。しかし、使用価値をもつ具体的な有用物をつくり出す労働、「具体的有用的労働」（①七九ページ／六一ページ）は、商品の種類ごとに異なるものですから、「共有物」にはなりえません。結局「共有物」として残るのは、ただ抽象的な人間の労働そのもの、「抽象的人間的労働」（①六五ページ／五二ページ）ということになります。こうして、商品の交換関係または交換価値のうちのみならずからを表わしている共通物とは、抽象的人間的労働であり、それが商品の価値を規定することが明らかにになります。

では、個々の商品に特有の価値量は、どのようにして決まるのでしょうか。「それに含まれている『価値を形成する実体』、すなわち労働の、分量によってである。労働の量そのものは、その継続時間によってはかられ、労働時間はまた、時間、日などのような一定の時間部分を度量基準としてもっている」（①六六ページ／五三ページ）。

商品の価値は、これを生産するのに必要な労働量（労働時間）によってきまるといふ法則が、「価値法則」とよばれるものです。各商品は、市場において交換・販売されることを予定していますから、商品の「価値」も交換・販売をつうじて社会的に承認されるものでなければなりません。したがって一商品の価値量を規定する「労働時間」も、「一商品の生産に平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間」（同）、つまり平均的・社会

的労働時間ということになるのです。一年を通してみると、卵一個を生産するのに必要な社会的労働時間と米五〇グラムを生産するのに必要な社会的労働時間が等しいからこそ、卵一個と米五〇グラムが等しい価値をもつ物として交換されることになるのです。

ここで、今後の展開のために重要だと思われることを、三つ指摘しておきたいと思います。

一つは、商品の価値量は目に見えないということです。ある商品にどれだけ労働時間が含まれているかは、商品それ自体には表示されていません。しかし、商品を市場に出して商品の交換が行われるようになると、交換価値という一定の割合として目に見える形で相対的に示されることとなります。商品の価値が交換をつうじて目に見える現象形態をとったものを、「価値形態」といいます。

二つは、労働の生産力と価値との関係です。一商品の価値は、その商品の生産に必要な労働時間によって規定されますから、例えば、新たな機械の発明と社会的な普及によって、一労働時間あたりのその商品の生産量が二倍になったとしますと、一個あたりの商品の生産に必要な労働時間は半分になってしまいますので、その商品の価値も半分になってしまいます。

「すなわち、一商品の価値の大きさは、その商品に実現される労働の分量に正比例し、その労働の生産力に反比例して、変動する」（①六九ページ／五五ページ）。

三つは、価値を規定する抽象的人間的労働に関わる問題です。

価値を規定する労働は、もっぱら量的に規定される抽象的人間的労働であるとお話ししてきましたが、それはあくまで商品の「質」を規定する具体的有目的労働から区別される労働というかぎりの話であって、価値を規定する抽象的人間的労働それ自体として考察したときには、単純かつ社会的平均労働が基準になるのですから、そ

れを基準に考えるとき、労働に一定の質的相違の生じることとは否定できません。

その一つは、「単純労働」と「複雑労働」の区別です。どんなに単純な労働から生まれる労働生産物であっても、それが労働生産物であるかぎり、その商品は価値をもちます。したがって価値を規定する労働は、もともと単純な労働を基準とすることになります。「それは、平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である」（①七五ページ／五九ページ）。

これに対して、高等教育を受けた労働力あるいは修練した労働力から生まれる労働は、より質の高い複雑労働として、単純労働と同じ労働時間であっても、より高い価値を生産するのです。つまり「より複雑な労働は、単純労働の何乗かされたもの、またはむしろ何倍かされたものとしてのみ通用」（同）し、「さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は、生産者たちの背後で一つの社会的過程によって確定」（①七六ページ／五九ページ）されるのです。

その二つは、「平均労働」と「強化労働」の区別です。もともとマルクス自身がこういう区別をしているわけではないので、とりあえず「高村流」区別だということをお断りしておきます。

価値を規定する労働時間は、社会的労働時間であることをみてきましたが、それは言いかえれば、社会的・平均的な労働強度（密度）を基準としてはかれる社会的・平均的労働時間であることを意味しています。この社会的・平均的な強度の労働を、「平均労働」とよぶことにします。

これに対し、強化された過密労働（これを「強化労働」とよぶことにします）は、同じ一時間の労働時間であっても、平均労働に比べより多くの労働を含み、したがってより多くの価値を生産することになります。いま日本でも長時間の強化労働が過労死を生みだすことが社会問題となっています。それだけに、平均労働と強化労働と

を区別することは重要だと思えます。

マルクスは、第一篇「商品」においては、この用語こそ使っていないものの、後の箇所でも実質的にはこの区別をしています。第一部第四篇「相対的剰余価値の生産」第三章第三節c「労働の強化」のなかで、突然この問題が出てくるのです。

「与えられた時間内へのより大量の労働のこの圧縮は、いまや、それがあがるがままのものとして、すなわちより大きい労働分量として、計算される。『外延的大きさ』としての労働時間の尺度とならんで、いまや、労働時間の密度の尺度が現われる。……その一時間の生産物は、粗放な1/4時間の生産物に比べて、同じかまたはより多くの価値をもっている」(③七〇九ページ/四三二、四三三ページ)。

しかし、労働の強度(密度)が価値を規定するのだとしたら、そもそも商品の価値はどのようにして規定されるのかを論じた第一章「商品」のところでまず言及しておいてから、第三章「機械設備と大工業」における剰余価値の生産のところできさらに詳しく展開すべきものだと思われまます。

商品と貨幣の分離・対立

労働生産物としての商品は、価値と使用価値をもった商品として交換を前提に市場に登場してきます。

生産物が商品となるのは、人と人が、売り手と買い手という一定の商品交換の関係をとり結ぶかぎりにおいてのことです。経済学は、物を媒介にした人と人との関係を取り扱うのです。

商品交換では、等しい価値をもつ商品同士が交換されます。これを等価交換といい、商品交換の最初の形態は物々交換です。商品の価値は、この物々交換という人と人との関係のなかで、はじめて交換価値という目に見え

る現象形態(価値形態)をもつに至るのです。

いわば商品の奥に隠されていた価値という本質は、商品交換をつうじて、はじめて現象するのです。

マルクスは、この価値形態の項目で、商品の物々交換をつうじて、貨幣が誕生し、商品と貨幣の対立が生じてくることを、弁証法を駆使してドラマチックに明らかにしています。

まず、二〇エレのリンネル(麻)が一着の上着と交換される場合を考えてみます。この交換は等価交換ですから、二〇エレのリンネルと一着の上着は等しい価値をもっています。この場合、リンネルという商品のもつ価値は、上着という商品によって表示され、しかも、一リンネルの価値は、上着という別の商品の価値の二〇分の一という割合で「相対的」に示されています。ですから、この場合におけるリンネルの価値の現象形態を「相対的価値形態」とよぶことにし、これに対して、上着の価値の現象形態は、その二〇分の一がリンネルの価値に「等しい」という形態をとっていますので、「等価形態」とよばれています。

この関係は、「商品リンネルの価値が商品上着の身体で表現され、一商品の価値が他の商品の使用価値で表現される」(①八九ページ/六六ページ)ということが出来ます。等価形態にある商品は、上着の姿そのものという「あるがままの物が(他の商品であるリンネルの——高村)価値を表現し、したがって、生まれながらにして価値形態をもっている」(①九八ページ/七二ページ)ようにみえます。「そこから、等価形態の謎的性格が生じる」

(①九八、九九ページ/七二ページ)であり、それは貨幣において最高の謎的形態をとることになります。

こうして、「商品のうちに包み込まれている使用価値と価値との内的対立は、一つの外的対立によって、すなわち二つの商品の関係によって表わされ」(①一〇五ページ/七五、七六ページ)ることになります。いうまでもなく相対的価値形態にある商品が使用価値として、等価形態にある商品が価値として、対立するに至ったのです。

ここには、内と外の弁証法があります。「外的なものとは内的なものと同じ内容である。内にあるものは外にもあり、外にあるものは内にもある。現象が示すものはすべて本質のうちであり、本質のうちにあるものはすべて顕現されている」『小論理学』一三九節）。

つまり、商品の内における価値と使用価値の対立という「本質のうちにあるもの」は、商品交換をつうじて、一方では、使用価値としての商品（相対的価値形態にある商品）と、他方で交換価値としての商品（等価値形態にある商品）という外的対立に「顕現」され、内的対立が外的対立に転化したのです。

続いて、マルクスは、この個別的な価値形態を展開していき、リンネルの相対的価値形態には、様々な商品の等価値形態が対応することを示します。

二〇エレのリンネル＝一着の上着

＝一〇ポンドの茶

＝四〇ポンドのコーヒー

＝一クオーターの小麦

＝等々

さらにこの関係を逆転させてみると、一着の上着、一〇ポンドの茶、四〇ポンドのコーヒー等々のあらゆる商品の相対的価値が、すべて二〇エレのリンネルという特別な一つの商品の等価値態で示されることとなります。これによって等価値態にある一つの商品が、すべての商品の相対的価値をあらわすことになり、この特別な一つの商品（この場合はリンネル）は、「一般的等価値態」にある商品、「一般的等価値物」（①一一四ページ／八一ページ）とよばれ、他のすべての商品に対立することになるのです。

この一般的等価値物としての特別な商品が、貨幣という商品なのです。貨幣商品は、最初米や塩がその役割を果しますが、やがて金や銀として定着します。貨幣は一つの商品でありながら、商品世界から排除され、すべての商品に対立する「富の、いつでも出動できる、絶対的社会的な形態」（①二二二ページ／一四五ページ）となるのです。

「交換過程は、商品と貨幣とへの商品の二重化を、すなわち、諸商品がそれらに内在する使用価値と価値との対立をそこに表わす外的対立を、生み出す。この対立においては、使用価値としての諸商品が交換価値としての貨幣に相対する」（①一七八ページ／一一九ページ）。

こうして、商品の内にあつた使用価値と価値の対立は、商品と貨幣という外的対立に転化していくのです。いわば内的対立が外的対立へ移行したのです。貨幣は、商品交換という人と人との関係から生まれた物であるにもかかわらず、富の絶対的形態として人のうえに立ち、人を支配する神と同様の物に転化し、「物神崇拜」の象徴となるのです。コロンスのいったように、「金はすばらしいものである！ 金をもつ者は、自分の望むことはなんでもできる」（①二二二ページ／一四五ページ）かのような物神性を発揮します。

貨幣と恐慌の可能性

貨幣は、何よりも「価値の担い手」として他の商品の価値量をはかるモノサシ（「価値の尺度」）となるものですから、どんな価値量でも表現しうるように「度量基準」という目盛りが必要となります。

その目盛りの単位は、最初は貨幣に使われる金や銀の重量で決められました。イギリスの貨幣単位の「ポンド」は、一ポンドの重さの銀の価値を表わすところから来たものです。日本の江戸時代の貨幣単位「両」も、金

四匁（一匁は三・七五グラム）という重さの単位を表わすものでした（第一冊一九八ページ）。

しかし価値尺度としての貨幣は、商品の価値の章標となるものですから、「これこれの価値をしめすもの」として社会的に通用しさえすれば、必ずしも金や銀である必要はありません。「貨幣の章標に必要なのは、それ自身の客観的社会的妥当性だけであり、紙製の象徴はこの妥当性を強制通用力によって受け取る」（①二二八ページ／一四三ページ）。国家が強制通用力を与えるならば、価値をもたない紙幣もまた貨幣となりうるのです。

また貨幣は、価値尺度にとどまらず、商品の流通手段となります。マルクスは、以後商品をW（ドイツ語のヴァーレの頭文字）、貨幣をG（ゲルトの頭文字）で表示していますが、物々交換は、W—Wであつたのに対し、貨幣を媒介とする商品交換は、W—G—Wとなります。重要なことは、物々交換の場合には、自分の商品を販売することは、自分の欲しい商品を購入すること、つまり販売と購買とは統一していたのに対し、商品交換の場合には、自分の商品を売って貨幣を手にしないかぎり、自分の欲しい商品を購入しえないこと、販売と購買とが分離し、対立するに至るのです。その意味では商品所有者が、自分の欲しい商品を手に入れるためには、手持ちの商品をまず先に販売しなければならぬという、「商品の命がけの飛躍」^{サルトル・メルタール}（①一八〇ページ／二二〇ページ）が求められているのです。

さらに流通手段としての貨幣は、商品と貨幣との同時交換ではなく、商品を買った後で支払いをするという異時交換（信用売り）を生みだします。商品の売り手は債権者、買い手は債務者となり、この場合の貨幣は、債務者の「支払手段」となります。この支払い手段としての貨幣は、商品取引が発展するなかで、「手形」という信用貨幣にとつて代わられることとなります（詳しくは第三部で）。買い手は、手形で支払うことにより、支払手段としての貨幣は売り主に移転したことになりますが、手形が満期日に不渡りとなり決済されなければ、価値の

担い手としての貨幣は売り主に移転したことはなりません。いわば信用貨幣としての手形の登場により、価値の担い手としての貨幣と、支払い手段としての貨幣とが、分離・対立するにいたるのである。

マルクスは、準備草稿のなかで、商品と貨幣の対立が生じたことから、二つの側面で恐慌の可能性が生じた、と述べています。

「恐慌の一般的可能性は、資本の変態の過程それ自体のなかに与えられており、しかも二重に与えられている。すなわち、貨幣が流通手段としての役割を演ずるかぎりにおいて——購買と販売との分離。次に貨幣が支払手段としての役割を演ずるかぎりにおいて。この場合、貨幣は、二つのちがった時機に、価値の尺度として、また価値を実現するものとして作用する。この二つの時機は分離する。……第一の可能性は第二の可能性がなくとも可能である——すなわち、恐慌は、信用がなくとも、貨幣が支払手段として機能するといふことがなくとも、可能である。しかし、第二の可能性は、第一の可能性がなければ、すなわち購買と販売とが分離するといふことがなければ、不可能である」（全集②Ⅱ六九四、六九五ページ／『剰余価値学説史』⑥一六八、一六九ページ）。

恐慌というのは、社会的総資本の再生産過程の攪乱要因が蓄積して生じる、再生産過程の麻痺を意味しています。それは資本主義的生産様式に特有な現象なのですが、資本主義以前の生産様式のもとで、流通手段としての貨幣が登場したところに、すでにその萌芽（恐慌の抽象的可能性）があることを、マルクスはみてとつたのです。この抽象的可能性がいかに具体的可能性に転化し、さらには、この具体的可能性がいかに現実性、必然性に転化していくか、なぜ資本主義的生産様式が恐慌を必然的なものにするかの研究は、第二部の課題となります。

最後に、この準備草稿との関係で『資本論』のなかの恐慌の二つの可能性を論じた箇所を紹介しておきましょう。

販売と購買との対立は、言いかえれば、商品と貨幣との対立という、対立の一般的形態の発展したものです。したがって「商品に内在的な対立、すなわち使用価値と価値との対立」（①一九三ページ／二二八ページ）は、商品と貨幣の対立を生みだし、その対立がひいては販売と購買との対立という「商品変態上の諸対立においてその発展した運動諸形態を受け取る。だから、これらの形態は、恐慌の可能性を、とはいえただ可能性のみを、含んでいる」（同）のです。

次に支払手段としての貨幣の機能について、マルクスは、「一つの媒介されない〔直接的〕矛盾を含んでいる」（①二三三ページ／一五一ページ）と述べています。支払手段としての貨幣は、信用貨幣としての手形にとつて代わられ、現実には貨幣による支払いはなされていないところから、「貨幣はただ観念的に、計算貨幣または価値尺度として機能」（同）しているにすぎないのですが、手形が不渡りということになると、「貨幣は、流通手段として、すなわち、素材変換のただ一時的媒介的な形態として登場するのではなく、社会的労働の個別的な化身、交換価値の自立的な定在、絶対的商品として登場する。この矛盾は、生産恐慌・商業恐慌中の貨幣恐慌と呼ばれる時点で爆発する。……貨幣は、突然かつ媒介なしに、計算貨幣というただ観念的なだけの姿態から硬い貨幣に急変する」（①二三三ページ／一五二ページ）。いわば、恐慌において分離・独立していた価値の担い手としての貨幣と支払い手段としての貨幣は、再び統一を回復することになるのです。

こうして商品に内在する使用価値と価値は、「販売と購買の対立」、「支払手段としての貨幣と価値の担い手としての貨幣の対立」をつうじて、恐慌の抽象的可能性となるのです。

マルクスは、使用価値と価値とは、本来一つの商品のなかに存在していた「内的に非自立的であるもの」（①一九三ページ／二二八ページ）であったのに、商品と貨幣の外的対立という一般的形態を生みだし、この対立は展開して販売と購買、支払手段としての貨幣と価値の担い手としての貨幣という「外的な自立化」（同）に転化したところから、再度「統一が強力的に自己貫徹する」（同）のであり、それが恐慌であると考えられています。つまり恐慌を、使用価値と価値との内的統一から外的対立へ、外的対立から外的統一へという弁証法的発展過程としてとらえているのです。

準備草稿のなかでも同様に、「相互に一体を成す関係にあつて分離しえない諸契機が、引き離され、したがってまた暴力的に統一される」（全集②Ⅱ六八八ページ／『剰余価値学説史』⑥一六〇ページ）とか、「恐慌とは、独立化した諸契機のあいだの統一の暴力的な回復」（同六九四ページ／同二六七ページ）であるととらえられています。

このように統一された諸契機が独立化し、引き離され、その引き離された諸契機が暴力的に統一を回復するのが恐慌だ、との見地は、マルクスの恐慌論の太い論理的骨格として、恐慌論全体をつらぬくこととなります。

以上で、第一部第一篇「商品と貨幣」は終わったことにし、次回は、第二篇「貨幣の資本への転化」、第三篇「絶対的剰余価値の生産」に入りたいと思います。